

永続する
25
m
プールの
タイン
について

登場人物

白岩 晴香（27） 昼は事務職の会社員、夜はキャバ嬢と

して働く。※源氏名…サキ

久留米 修二（62） キャバクラの客。地方公立大学の元

植物学准教授。

白岩 頼子（48） 晴香の母。

アヤ（22） 晴香が働く店のキャバ嬢。

久留米 小百合（60） 久留米の妻。写真のみ。

事務員 1 晴香の会社の先輩。

事務員 2 晴香の会社の先輩。

黒服 晴香が勤めるキャバクラのボーイ。

若い男 頼子のヒモ。ホスト。

※アヤと事務員 1、2 のどちらかは同じ役者が演じることも可。

※黒服と若い男は同じ役者が演じることも可。

あらすじ

父親の家庭内暴力から逃げるため、母子家庭に育った白岩晴香（27）。昼は事務員、夜はキャバクラ嬢として働き、母に毎月生活費を振り込んでいる。

そんな終わりの見えない生活を過ごす中、久留米修二（62）が、晴香が働くキャバクラの客として訪れる。元大学准教授であった久留米は、キャバ嬢だけでなく、会社員である晴香の顔も知ることに。しかし久留米は、キャバ嬢の晴香と会社員の晴香が同一人物であることに気付かない振りをしたまま、2つの顔を持つ彼女に接し続ける。

親子とも恋人とも、ましてやただの客とキャストとも割り切れない二人が、お互いに救いを求め、時に苦しみ、終わらない日常に生きる力を与え合う。

○ 舞台装置

舞台上手側にロッカールーム。中央にキャバクラのソファとテーブル。下手側には公園のベンチが置かれている。

① 会社・ロッカールーム

白い蛍光灯の侘しい光。

事務員 1、事務員 2 が制服から私服に着替えたり、メイクを直しながら喋っている。

事務員 1 「だからさ、私言ったのよ、ちゃんとメモ取りなっ」

事務員 2 「うん」

事務員 1 「そしたらさ、『はい！』って」

事務員 2 「言うんだ」

事務員 1 「そう、返事だけはいいの。でもさ、次見たら

また取ってないのよ、メモ」

事務員 2 「取ってないんだ」

事務員 1 「取らなくても別にね、忘れないならいいのよ」

事務員 2 「忘れなきゃいいよね、別に」

事務員 1 「でもさ絶対忘れてんだよ、いつも」

事務員 2 「忘れてるよね、いつも」

事務員 1 「それで何回も何回も結局私が同じこと教えん

の」

事務員 2 「何回も教えんのまじだるいわ」

事務員 1 「もうまじあの新人モンスター」

事務員 2 「モンちゃんだね」

事務員 1 「そうだよ。モンちゃんのせいで私ストレスで

ニキビ超できたもん」

事務員 2 「マジ？ ニキビは最悪だわ」

事務員 1 「てかさ、それでこの前皮膚科行ったのね」
事務員 2 「美容皮膚科？」
事務員 1 「そう。そしたらさ、そこなんか、ちょっとした施術もやってるっぽくて」
事務員 2 「施術って？」
事務員 1 「埋没とかさ」
事務員 2 「ああ！へえ、皮膚科で」
事務員 1 「しかも、そんな高くなって」
事務員 2 「そうなの、いいじゃん」
事務員 1 「いいよね、埋没。でも流石に怖いじゃん」
事務員 2 「さすがにね」

事務服姿の白岩晴香（27）、通勤鞆を持って登場。

晴香 「お疲れ様です」
事務員 1・2 「お疲れ様です」
事務員 1 「あ、ねえ、なんか白岩さんとこの課長、最近髪の毛増えてない？」
晴香 「え、まって。超思っていました！」
事務員 1 「やっぱり！」
事務員 2 「そうだよね！」
事務員 1 「何してるんだろ」
晴香 「エクステ？」
事務員 2 「エクステ!？」
晴香 「なんか、あるじゃないですが、髪の毛 1 本 1 本に人工毛結びつけて増やす的な」
事務員 1・2 「ああ」
事務員 1 「なんか CM で見たことある」
事務員 2 「CM やってるね」
晴香 「いや、知らないんですけど、それかなって勝手に。

なんかおじさんたちの間で流行ってるっぽいですよ」

事務員 1・2「へえ」

事務員 1「てか、なんでおじさんの流行り知ってるのよ」

晴香「なんか、SNSで」

事務員 2「SNSでおじさんフォローしてんの？」

晴香「勝手に色々流れてくるじゃないですか」

事務員 1「勝手に流れてくるのって、自分が見た投稿に関連するやつでしょ。私最近コスメとナイトブラの広告ばっか流れてくるよ」

事務員 2「わかる！ 私も、脱毛かナイトブラだわ」

晴香「私も前までそうだったんですけど、脱毛調べてたら逆に増毛の広告も出るようになって」

事務員 1「ああ、それで」

晴香「企業は私たちに毛を無くさせたいのか増やさせたいのかどっちなんでしょ」

事務員 1「生やして、無くして、生やして、無くして」

事務員 2「エンドレスゲームに巻き込まれたね」

晴香「戦略にまんまと引っかかりましたね」

事務員 1「てか、増毛ってどこでやってくれるんだろ？」

事務員 2「増毛サロンってあるんじゃない？ 脱毛サロンの反対で」

晴香「あ、なんか最近皮膚科とかでもやってくれるところあるらしいですよ」

事務員 1「え、そうなの！ ねえ、皮膚科でさ、埋没でさるの知ってた？」

晴香「埋没？ 目の？」

事務員 1「そうそう！」

晴香「ああ、聞いたことあります」

事務員 1「あれってどうなんだろ」

晴香「どうって？」

事務員 2 「危なくないのかな？」

晴香「ああ……でも整形って、どこでやったってある程度危ないですよね」

事務員 1 「まあそうなんだよねえ、結局は」

事務員 2 「結局そうだよね」

晴香「やるんですか？」

事務員 1 「いや、たまたまね、見かけたから気になっただけ」

晴香「ああ」

事務員 1 「てか、白岩さん目綺麗だよね」

晴香「え？　そうですか？」

事務員 2 「たしかに、綺麗」

事務員 1 「二重幅広いよね」

事務員 2 「広いね」

晴香「ああ、この目は母の目なんです。もう、鏡見たびに母親が写ってるみたいな感じがしてすごい嫌なんですよね。大人になって化粧するようになってからは特に」

事務員 1 「だんだん親に似てくるよね、どうしてもね」

事務員 2 「だよね、似てくるよ」

晴香、ロッカーについている鏡をじっと見つめた後、気を取り直したように鞆から香水を取り出し、サッと自分に振りかける

事務員 1・2 「いい匂い」

晴香「あ、ローズ系です」

事務員 1 「いつもいい匂いさせてるよね、白岩さん」

事務員 2 「うん、ふわってね、すれ違う時とか」

晴香「そうですか？　ありがとうございます。香り物、好きなんです。リフレッシュできるから」

事務員 1・2「わかる」

事務員 1「私も香水集めてみようかな」

事務員 2「コスメはもう色々試したしね」

事務員 1・2、帰り支度が整う。

事務員 1「じゃ、先行くね」

事務員 2「私も」

晴香「あ、お疲れ様でした」

事務員 1・2「お疲れ様」

事務員 1「ねえ、さっき言ってた皮膚科、今度一緒に行こうよ」

事務員 2「あ、行こ行こ！」

事務員 1・2、喋りながら退場。

晴香、煌びやかなドレスを見に纏い、髪をアップにし始める。

会社事務所のロッカールームは、気がつくときゃバクラのロッカールーム兼控室に。

② キヤバクラ・ロッカールーム

アヤ（22）、すでに身支度が整った状態で登場。

アヤ「お疲れ様です」

晴香「お疲れ様」

アヤ、近くの椅子に座り、タバコを吸う。

晴香「アヤちゃんタバコ吸ったっけ？」

アヤ「やめてたんすけど、最近ちょっと復活しちゃいました」

晴香「あるよね、そういう時」

アヤ「サキさん吸わないでしたっけ？」

晴香「やめたの。私昼職かけもちだから」

アヤ「うわ、そうだ。サキさんよくやりますよほんとに」

晴香「もうこの歳だからさ、夜だけじゃ流石に怖いっしょ」

アヤ「え、サキさんほんとの歳、いくつですか？」

晴香「27」

アヤ「え！」

晴香「何の『え！』よ」

アヤ「見えないです、全然」

晴香「27に見えないって、ほめられてんのかよく分かんないんだけど」

アヤ「ええー、だってサキさん私とそんな変わらないくらいかと思ってたんで」

晴香「ありがと」

アヤ「ええーまじか……。いつまで続けるんですか？」

晴香「さあ、やれるだけ？」

アヤ「やれるだけかあ、きついなあ」

晴香「辞めたいの？」

アヤ「うーん、辞めたいって思う時もあるし、でも自分、これしかできないから、しゃあないっていうか」

晴香「これしかできないってことないでしょ。これできたらだいたいの接客業はできるよ」

アヤ「いや、自分根気ないんで、すぐお金欲しいんですよ。それに時給千円でコツコツとか無理だし」

晴香「まあね、稼ぎはいいよね。こっちの方が」

アヤ「やっぱサキさんくらい可愛かったらなあ、長く続けられるんだろうなあ」

晴香「可愛いでしょ、アヤちゃんも十分」

アヤ「いやいやいやいや！　いつも思うんですよ、あと1ミリ二重幅が広がったらなあ、あと2ミリ鼻が高かったらなあ、あと3ミリ顔が細かったらなあって」

晴香「そんなの、なんの意味もないよ」

アヤ「そんなことないですよ！　その数ミリが、直接稼ぎに比例してくるんですから！」

晴香「そんなの、今だけだよ」

アヤ「晴香さんは思わないんですか？　そういうこと」

晴香「あと1ミリ人中短じんちゆうかったらとか？」

アヤ「そうそう、そういう系の」

晴香「あんま考えたことないかも」

アヤ「うわー、言ってみてー」

晴香「でも私も言ってみたいよ、アヤちゃんみたいなこと」

アヤ「え？」

晴香「もう少しこうなりたいとか、考えられないの。なんか、とりあえず今日を生き延びるので精一杯って言うか」

アヤ「いやいや、私も余裕ないっすよ！　今日だって、所持金二千五百円しかないし。生き延びるの精一杯っす」

晴香「そういうことじゃなくて。なんかさ、そういう、こうなりたい、ああなりたいっていう欲求って、安心とか安全とか、最低限の欲求が満たされた次にくるものじゃない」

アヤ「そうなんすか？」

晴香「普通に考えてそうでしょ。戦場で、『あー、まつ

パしてー』とか思わないでしょ、絶対」

アヤ「ああ」

晴香「日々生きるので精一杯でさ。何が欲しいって言われたら、とりあえず安心、安全。それから自由」

アヤ「え、それって戦場での話ですか？　それともサキさんの話？」

晴香「……どっちもかな」

アヤ「今、ここ、戦場なんすか？　私って戦友？」

晴香「（笑って）たしかに、ある意味戦友だね。でもここが戦場っていうか、もう生きてる時間がずっと闘ってるって感じ」

アヤ「え、こわ。何と闘ってるんすか？　あ、『自分自身』とかやめてくださいね。そういう意識高い系、冷めるんで」

晴香「（笑う）自分と、じゃないね。何と闘ってるのか分かってる時もあるけど、分かんない時もある。でも確実に、戦いではあるんだよ。できるだけ負けないようにしないといけない。しかも終わらないの。終われないんだよね、なんだか」

アヤ「……え、めっちゃ疲れませんか？」

晴香「そう！　めっちゃ疲れてるんだよ。もうずっと。何年も。だから私は、顔の余白をあと数ミリ減らすとか、頬骨をもう少し高くするよりも、今はとりあえず一旦人生の中休みか、揺らがない安心が欲しいよ」

アヤ「揺らがない安心……何すか、それ？」

晴香「分かんない。探してんの、それをずっと」

アヤ「ふうん」

間。

アヤ「……サキさん、いつからこの仕事してるんですか？」

晴香「さあ、もう分かんない」

アヤ「大学行ってたんですか？」

晴香「高校中退」

アヤ「え、やばいっすね！ 私も高校は出てますよ！」

晴香「だよね」

アヤ「勉強むりだったんですか？」

晴香「お金なくなっちゃって」

アヤ「ああ……」

晴香「あと、引っ越したりしないので」

アヤ「……色々あったんすね」

晴香「まあね、皆あるからね、色々は」

黒服、袖から顔を出す。

黒服「サキさん、新規様フリーで5番卓お願いします」
サキ「はい」

晴香、黒服に続いてロッカールームを退室。
フロアへ。

③ キャバクラ・フロア

どちらかというと落ち着いた雰囲気店内。

ビロードのソファに、地味な古いスーツを着た
久留米修二⁶²が落ち着かない様子で座っている。

晴香、久留米の席へ来て、

晴香「いらっしやいませ」

久留米「あ、どうも」

晴香「ご来店ありがとうございます。サキです」

久留米、立ち上がって頭を下げ、

久留米「あ、どうも。久留米です」

晴香「お隣良いですか？」

久留米「あ、はい、どうぞ」

晴香、久留米の隣に座る。

晴香「あら、いい香りのコロンですね」

久留米「え？　コロン？」

黒服、メニューを見せる。

晴香「あ、お飲み物、何になさいますか？」

久留米「あ、えっと……」

晴香「お酒は飲めます？」

久留米「あの、あんまり強くないんですけど、今日は少しだけ」

晴香「じゃあ薄めで作らせますね。ウイスキーは好きですか？」

久留米「ええ、まあ、はい」

晴香「では角の水割りはいかがですか？」

久留米「はい、それで。薄めで」

晴香「分かりました。良ければ私もいただいても？」

久留米「はい、はい。どうぞ」

黒服「承知しました」